

「明日から、転校生がこのクラスに来ます。日本人ではなく、タイの生徒です」

担任の教師がホームルームでそう言ったとき、クラスが一斉にざわめいた。中学二年生という多感な時期にある生徒たちにとっては、「転校生」という響き自体がワクワクするものだったし、なおかつ「日本人ではなくタイの生徒」という意外性が、さらに私たちの興味を惹いた。

「男の子です」

という担任の言葉に男子はややガツカリし、女子はよりいっそうワクワクしたが、男子でも女子でも、明日が興味深い日であることは間違いないかった。

担任の教師は、

「皆さんに気を付けて欲しいことがあります」と言ったあと、真剣な表情で、こんなことを言った。

「タイでは、頭を撫でるといのは、大変な侮辱行為です。日本人に向かって顔に唾を吐きかけるようなものです。頭を撫でることは絶対にしないで下さい」

今から三十年ぐらい前の中学生である。タイの文化など、ほとんど誰も知らなかったし、情報も得られなかった。私もまた、

（タイでは頭を撫でることはタブーなのか。じゃあ、先生はどうやって褒めるんだろう）と、ぼんやりそんな疑問を感じたりした。そして、翌日。転校生はやってきた。同じアジア人だが、明らかに外国人と分かる風貌だった。浅黒い肌、クリクリとカールした髪、彫りの深い顔……。

（端正な顔ってこういう顔なんだ）

私は彼の顔を見ながら、そんなことを思った。日本人の美意識からしても、明らかに「美形」の範疇に入る容姿だった。目もクリッと大きい目をしており、「サッカーが好きです」という自己紹介の通り、スラリとした体格をしていた。女子の誰かが、「かっこいいね」と呟いた。長い本名の一部を取って、彼は「ハン君」というあだ名になった。

父親の仕事の都合で日本に来たというハン君にとって、日本の中学校の授業は大変だったと思う。英語はなんとかついてくるのができても、国語や理科はかなり大変だったようだ。数学も、簡単な計算問題ならまだしも、文章題になるとついてくるできない。

現在ならそれなりの配慮がなされるのかもしれないが、今から三十年近く前の中学校教育では、そのような配慮はなされなかった。

だが、日本人の我々が驚いたのは、ハン君の屈託のなさだった。先生に指されて答えられないときも、ハン君は平然としていた。中学生といえば、人生で一番シャイな時期である。クラスのみんなが注視しているなかで答えを間違えるというのは、日本人の感覚からすれば恥ずかしいことなのだが、ハン君はまったく意に介していないようだった。

一度、こんなことがあった。英語の授業で先生が黒板に英文を書いた。穴埋め問題のように一部がカッコで隠されている。先生は、ハン君にカッコのなかを答えるように求めた。「ハン君はタイの子だから、英語はわりとできるのよねえ？」

先生はそう言って気楽に訊いたのだが……。ハン君は、

「分かりません」

と簡単にさじを投げてしまった。クラス中がどっと笑った。タイ人のハン君にとっては、英語は厳密には母語ではなく、難しかったのかもしれないし、日本特有の受験英語に馴染みがなくて分からなかったのかもしれない。それでも、多くの期待を裏切って、

「分かりません」

と平然と答えている姿は、「やはり違うなあ」という印象をみんなに抱かせた。このとき、先生も苦笑して怒らなかつたのだが、ハン君にはドジをしても責められない愛嬌のようなものがあった。「外国人だから」というより、もっと本質的な人徳だったように思う。

そしてその人徳は、クラス内の深刻な問題にも穏やかに及んでいった。

私のクラスには、いじめがあった。T君という勉強も運動も苦手な生徒がいて、彼がいじめのターゲットになっていたのだ。中学生にとって生徒を評価する基準はどうしても「勉強」と「運動」の二つになりがちである。そしてその両方が苦手な者は、どうしてもいじめの対象になってしまう。人間の能力の要素は多岐にわたるのだが、十代前半では、まだそんなことは分からない。T君は勉強と運動が苦手であるという理由で、かなり深刻ないじめに遭っていた。ものを隠されるとか仲間に入れないといったいじめだったが、中学生にとってはつらいものだ。給食の時間になると、仲の良い者同士で机をくつつけあって食べるのだが、T君は机をくつつける相手がおらず、いつも一人で食べていた。自分が孤立していることをクラス中に宣言しているようなものであり、とても可哀想な光景だった。

おそらく、多くの生徒が「可哀想」だと思っていたと思うが、誰も「いじめはやめよう」

とは言わなかった。言えないのだ。そんなことを言えば、いじめのターゲットがT君から自分に移行する可能性がある。それは誰にとっても怖いことだった。私もまた、勇気のない生徒の一人であり、孤立しているT君を見て「可哀想だなあ」とは思っても、村八分を諷めることはできないでいた。だが、ハン君は違った。T君にも平然と声をかけるのだ。休み時間にみんなでサッカーをするとき、ハン君はT君にも、

「一緒にやろう」

と声をかけた。不良の一人が、

「Tにはパスを出さないでいいぞ」

とハン君に言うのだが、ハン君は平気でT君にパスを出す。さすがの不良もクラスのマスコットの存在になったハン君にそれ以上の注意はできず、ただ黙って見ているしかなかった。それから、ハン君は積極的にT君に話しかけた。下校時間に雨が降り出したことがあり、傘を持っていないT君が濡れながら歩いていると、ハン君は、

「一緒に入ろう」

と傘を差しだし、並んで歩いて帰った。多くの生徒が怖れるいじめターゲットの移行を、ハン君はまったく怖れなかった。ハン君は、裏表がない生徒だった。通知表を受け取ったときも平気でみんなに見せていたし、ひどい点数の期末テストの答案用紙も、まったく隠さなかった。ハン君のなかでは、それらは隠すほどのことでもないようだった。そして、クラスで立場が弱い生徒がいても、ハン君はまったく気にせずに、同じ立場まで引き上げようとした。それは多くのクラスメイトにとって、驚きだった。

そのうち、いじめられていたT君に変化が表れるようになった。だんだんと、クラスに馴染むようになってきたのだ。

「Tは誘わないでいいよ」

と誰かが言っても、ハン君はT君を誘う。そんなことが続いているうちに、T君はみんなの輪に入ることが当然のようになってきた。女子の注目を浴びても男子から嫉妬されなという人徳を持ったハン君の行動は、その辺の不良の言葉より影響力があった。女子と同じように、男子もいくつかのグループに分かれて行動していたのだが、ハン君はそんなことおかまいなしに、みんなと対等に付き合った。そして、ハン君のなかでは、いじめられていたT君も対等だった。ハン君にとっては、みんなが怖がる不良も、運動神経抜群の二枚目の少年も、ひょうきんでクラスの人気者も、みんな対等だったのだ。音楽の授業で、一人ずつ前に出て校歌を歌うという試験があったのだが、そのとき、ハン君は音程を大き

く外し、みんなからの爆笑を誘った。そのとき、T君も楽しそうに爆笑していた。それを横目で見て、私はこのクラスからいじめがなくなったことを確信した。

「頭を撫でることは侮辱になる」

といった説明を先生から聞いたとき、私がタイの人に抱いたイメージは、「デリケートで自尊心が高い」というようなことだった。ところが、ハン君はそんなイメージの生徒ではなかった。クラスに自然に溶け込み、分断されていた生徒たちをごく自然につきなぎ合わせていった。愛嬌のあるハン君の言葉は、教師の無力な注意よりよっぽど効果があった。

タイにだっていじめはあるかもしれない。だが、それは日本ほど深刻なものではないように思えた。人間関係に壁を感じないハン君のような生徒がいる限り、深刻ないじめには発展しないように思えるのだ。

タイから来たハン君は、シャイで不器用な日本の中学生に良い作用をもたらした。学校を休みがちだったT君は、「卒業写真をみんなと一緒に撮るのは無理」だと思われていたが、中学三年の春、みんなと一緒に卒業写真に写ることができた。ハン君の功績は大きい。

あれから三十年近くが経った。一度もタイには行ったことがないが、いつか行きたいと思っている。クラスからいじめをなくした少年がどんな国で育ったのか、この目で見てみたいのだ。